

トピックス

但馬ピーマンの病害発生状況を調査

ピーマン産地における病害の発生状況調査を実施した。その結果、斑点細菌病が多かったが、白絹病やうどんこ病は少発生であった。また、青枯病の発生圃場では、抵抗性品種の接木苗の防除効果が得られていた。

内容

本県のピーマンは国指定産地に指定され、出荷量は全国13位の主力品目である。農作物の安定生産には病害虫の適確な防除対策が重要である。そのために現地調査による病害虫の発生動向を把握する必要がある。そこで、産地での病害発生状況や被害程度の把握を目的に、豊岡農業改良普及センター（以下、普及センター）の協力を得て調査した。

2022年7、8、10月に豊岡市内の8～10圃場を巡回し、1圃場50株を対象に主な病害について調査した。最も発生が多かったのは斑点細菌病であった（図）。7月下旬ですでに発病が認められ、その後漸増して10月上旬には全圃場で確認され、発病株率75%となったが、症状は軽く、被害は少なかった。

本病は病原細菌が土壌中に残り伝染源となり、多湿条件で発生しやすくなる。2022年は梅雨が早く明けたが、定期的に降雨があり、高温多湿条件が続き発生が多くなったと思われる。白

絹病は7月下旬に発病株率0.4%とわずかに発生し、8月下旬には発病株率が10%に増加した。うどんこ病は10月上旬に発病が認められた。疫病の発生はみられなかった。

また、巡回圃場では青枯病の発生はなかったが、別圃場で発生していたので調査した。青枯病の被害軽減には抵抗性台木への接ぎ木が有効である。その圃場では、普及センターが導入を推進している青枯病抵抗性台木（「台パワー」）の接木苗と慣行の実生苗の両方を作付けしていた。発病株率は接木苗で15.6%、実生苗で82.7%であり、抵抗性台木の効果が確認できる結果となった（表）。

今後の方針

次作でも斑点細菌病を始め、各病害を対象に、初発や被害を早期に把握し、適確な防除につながるように普及センターと連携を図る。

川口 藍乃（豊岡農業改良普及センター）

（前病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

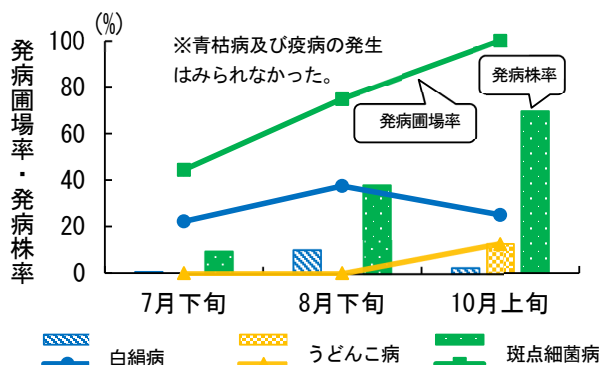


図 但馬ピーマン産地（豊岡市）における各病害の発生推移

表 接木苗及び実生苗の青枯病発病株率

調査時期	苗の種類	調査株数	発病株率(%)
8月下旬	接木*	320	15.6
	実生	480	82.7

※ 台木に青枯病抵抗性品種「台パワー」、穂木に品種「京ひかり」を使用